國中紙面の最も賢き新聞紙なり

時事新報

明治廿七年三月一七日 第二千八百九十九號 (戊午)

時事新報社電話番號 官報 二百八十九番 一千八百九十四番

時事新報には毎號詳細なる商況報告あり

（廣告料定價）時事新報の廣告料は悉て定價の通り申受くる筈なれども取次人の内には往々定價以下にて引受くる者ある由今後斯る事實を發見する時は直ちに其取次人に對し本社廣告の取次を謝絶する事もあるべき筈に付兼ね廣告依頼者諸君に公告す

本社（寄稿に付）東京府下を始め各府縣に通信社なるものありて是より各新聞社に報道を發送し各新聞社は之を受けて紙面を塡塞するより各社同一の記事を掲ぐるみと寡から ず 爾り時事新報社は社員並に通信員の多きを以て斯類の社信社にさへ報道すれば本社にも其報道は達する事と信ずる方多きが如し爲めに行違ひを生じたる場合も寡からざれば本社に記事論說を寄稿せんとする方は直接に本社に向け發送あらんを願ふ

時事新報社に進したる投書の原稿は凡て寄稿者に返戻せず又本社に保存せず

時事新報

本年一月のサインチーンス、センチュリー雜誌に登載の問題に關するユーリアス、フォーグル氏の論文を掲げたり其中金本位を維持するみとの困難なる次第を述べたる一節は大に參考となる可きものあれば意譯して以て社說に代ふ

金單本位維持の困難

近來世界の國々が相競ふて金本位を採用し金塊の需要著しく增加したるに就ては目下全世界に存在する金の量が果して此需要に應ずるに足るや否やは最も重大なる問題なり何となれば若しも金の量にして不足なるみと明なる以上は銀合ひ金本位に如何なる利益ありと稱するも之を實際に行ふて其利益を收るの路なければなり金論者は常に銀行業及び信用手形の仕組發達するに從て正金の需要大に減ず可しと云へり誠に尤千萬なる說なり今日にても會數の手形交換所に於て一年中に仕拂ふ金額は英國中に流通する金銀貨を寄合せたる數倍に上るのみならず取引の頻繁なる際には僅か一日の間に國中の通貨の總高に等しき巨額を仕拂ひたる例さへあり然りと雖も茲に記憶す可き一事は假令へ銀行及び信用手形の仕組が如何に發達するとも人間世界に全く通貨の入用を見ざるに至るは到底望む可らざるみとにして今試に經濟上の取引にて現金仕拂の廢す可らざる二三の場合を擧げんに第一勞役者の賃錢は大概悉く現金にて仕拂はざる可らざる性質のものなり レン、ラーヴィ氏の計算に據れば大英國中勞役者の賃錢の總計は千八百六十七年には四一九、〇〇〇、〇〇〇磅にして八十四年には五二一、〇〇〇、〇〇〇磅に上り ぬ りと云ふ其後同樣の割合を以て增加したるものとすれば本年の賃錢總額は五七五、〇〇〇、〇〇〇磅の響なり英國の看護に依り賃錢は大概毎週拂の定にして一度び勞役者の手に錢を受取るときは其錢は平均少なくとも三十日間は再び銀行に歸來るみとなきものと謂ふて大過なかる可し然れば五億七千五百萬磅の十二分の一即ち四千八百萬磅の通貨は常に勞役者の賃錢仕拂の爲めに絕えず大英國內に流通しつゝある勘定なり右の如き次第なれば流通貨幣が缺乏の境に瀕したるは勞役社會の爲めに取りて決して望ましきみとに非ず是れが爲めに賃錢低落の弊を生ずるは自然の數なり して亦た騷擾を容る可らざるなり勞役者の賃錢の年に體進〻 汽船、馬車等の運賃は凡て現金を以て拂ふ可きものにして其總額は賃錢と同じく年々大に增加しつゝあり又一切の小賣商賣、家賃、地代、租稅、郵便其他諸般の遊山見物等は何れも大概皆現金の仕拂を要するものなり又此外に人民が各自懷中に携へ及び家に貯ふる金高は必ず少額に非ざる可し斯の如き次第にして大英國人民の日々費用する現金の總高は流通貨幣の大部分を占るみと明なる其上に又諸銀行にて營業の準備金として儲へ置く金高も亦甚だ多し但し爲に云ふ準備金とは銀行營業法等に對する準備金にして銀行の業務を維持して某信用を保つが爲めに備へ置く正金を指して稱するものと知る可し銀行の信用を保持するに必要なる準備金の高は時と場合とに依て大に異なりと雖も兎に角に其業務の擴張するに從て次第に增加せざるべからざるの事實は疑を容るゝ餘地なし而して其準備金の